HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリャーク語の複統合性再考 ： その「新しさ」と人称スロットの特異性をめぐって
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 10, 41-59
Issue Date	2020-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/93108
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77606
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_41_59.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 10: 41-59（日本北方言語学会 2020）

［特集　言語類型論と北方諸言語研究］

コリャーク語の複統合性再考
―その「新しさ」と人称スロットの特異性をめぐって―*

呉 人 惠
（富山大学）

キーワード：語彙的動詞化接辞、ストレス・アクセント、所有者昇格、充当相、多人称標示

１．はじめに

環北太平洋地域は、世界的に見て複統合的言語が集中している地域のひとつとして知られている。その北端中央部に位置するエスキモー語を複統合性の極として、西に北東アジア、東に北米へと次第に統合度が弱まっていく連続変異を成すとされる (Fortescue 2013)。エスキモー語から見て西に境を接するチュクチ・カムチャツカ語族（イテリメン語を除く）もまた、複統合的言語として知られている。

呉人 (2015) では、チュクチ・カムチャツカ語族のうち、コリャーク語の複統合性について、北米側で同じく複統合的と言われるエスキモー語やイロコイ語族と対照させながら考察した。また、Kurebito (2017) では、コリャーク語の動詞の複統合性を支える屈折、派生における特質を論じた。本稿では、これらとは違う視点からコリャーク語の複統合性について再検討を加える。すなわち、古い、すなわちより進んだ複統合性を示すエスキモー語とは対照的に、チュクチ・カムチャツカ語族の複統合性は比較的新しいとする Fortescue (2013) の主張を取り上げ、その検証を皮切りに、コリャーク語の、特に動詞の複統合性に関し、次の 3 つの問題点について考察する。

(A) Fortescue (2013) がこの語族の複統合性を新しいとして挙げたいくつかの根拠が、コリャーク語について妥当かどうかを検証する。
(B) Fortescue (2013) がこの語族の新しい複統合性の中で、より進行した複統合性を示すとして挙げた所有者昇格 (possessor raising) と充当相化 (applicative formation) を取り上げ、その主張が妥当かどうかを検証する。
(C) Fortescue et al. (2017) が複統合的言語の特徴のひとつとして挙げた動詞の多人称標示に関し、コリャーク語が見せる特異点の本質を探り、複統合性の新旧との関連を示唆する。

* 本稿は、科学研究費基盤研究（B）「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」（18H00665、代表：呉人惠）の研究成果のひとつである。本稿の執筆にあたって 2019 年 10 月にロシア連邦ハバロフスク市でおこなった聞き取り調査では、主に Ajatginina Tat'jana Nikolaevna（1955 年、マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性）にコンサルタントとして協力していただいた。本稿は、日本北方言語学会第２回大会特別セッション「言語類型論と北方諸言語研究」（2019.11.9、富山大学）において発表した「コリャーク語の複統合性とその「新しさ」」に基づくが、当日いただいたコメントなどを踏まえ、修正を加えている。本稿の着想にあたっては、アンナ・ブガエヴァ氏（東京理科大学）から貴重なアドバイスや資料提供をいただいたことにも言及しておきたい。また、お二人の査読者の方には、今後の研究に繋がりうるきわめて貴重なご指摘・ご教示をいただいた。以上、本稿の執筆にあたってご協力いただいた皆様に心からお礼申し上げる。

なお、本稿で「コリャーク語」としているのは、数あるコリャーク語諸方言の中でも分布域が最も広く、正書法の基礎方言となっているチャウチュヴァン (Cawcəvan) 方言である。

２．コリャーク語の複統合性

複統合的言語は、「形態的単位としての 1 つの語にいかに多くの形態素をまとめこみうるかという、語の総合（synthesis、統合とも）の度合いが大きい言語を指す」（亀井等編 1996: 671）とされ、なかでも動詞の統合度の高さを指すことが多い。しばしば抱合との混同も見られるが、複統合性とは、Sapir (1921) が明確に規定したように、膠着的、孤立的、屈折的といった形態的な ‘technique’ の問題ではなく、1 語の中に形態素が内容的にも数的にもどれだけ集約されているかという統合の度合いの問題である。

ところで、宮岡 (1992: 22) は、「北東アジアには、複統合的言語といえる言語はみあたらない」としている。しかし、コリャーク語では次のように多くの形態素が盛り込まれた一語文 (holophrase) の創出が可能である。

(1) mət-ko-qoja-ɣijke-lqew-ŋəvo-la-ŋ
1PL.S-IPF-reindeer-catch-go.to-HAB-PL-IPF
「私たちはいつもトナカイを捕まえに行っている／いた」

(1) では、主要部である「〜しに行く」を意味するのは、-lqew である。その前には、これを副詞的に修飾する -ɣijke「捕まえる」が付加される。さらにこの意味上の目的語である qoja「トナカイ」が前接する。一方、-lqew の後ろには「習慣」というアスペクト的意味を持つ -ŋəvo が接続する。こうして形成された派生動詞語幹を、mət-（1 人称複数主語）、ko-..-ŋ（不完了）、-la（複数）という 3 つの屈折接辞が取り囲み、語を完結させている。すなわち、7 つの形態素がこの一語文を形成している。複統合性を量的に規定するならば[1]、(1) は統合度の高い語であると言って間違いないであろう。ちなみに、Fortescue (1994:2601) は、宮岡 (1992:22) とは異なり、チュクチ語やコリャーク語は “clearly fit the label ‘polysynthetic’” であるとしている[2]。

しかし、量的な尺度からだけでは、複統合性の本質を十分に捕捉しえたとはいえない。より質的な尺度、すなわち、複統合性を支える統辞論的な構造にも注目しなければならない。Fortescue et al. (2017:13) は、複統合的形態法を示す言語に集まる傾向のある、統合度を高める諸特徴として次の 13 点を挙げている（カッコ内は本稿筆者の説明）。

① Bound core pronominal（拘束形式による動詞多人称標示）
② Noun incorporation（名詞抱合）

[1] 複統合度を 1 語に含みうる形態素の多寡により量的に測る研究としては、Greenberg (1960) が筆頭に挙げられる。Greenberg (1960) は、語（W）とこれに含まれる形態素（M）の数の割合、すなわち、M/W により各言語の統合度を割り出している。具体的には、100 の見本語の M/W の割合の平均が 3.00 以上は統合度の高い言語であるとし、最も統合度の高い言語としてエスキモー語を 3.72 としている（英語は 1.68）。ただし、コリャーク語についての言及はない。

[2] Fortescue (2013) は、北東アジアではチュクチ・カムチャツカ語族以外に、アイヌ語とニヴフ語を複統合的言語であるとしている。

③　Heavy verbalizing affixes（語彙的な動詞化接辞）
④　Verb incorporation (single word serialization)（動詞抱合・動詞連続）
⑤　Adverb incorporation（副詞抱合）
⑥　Lexical affixes (locative and/or instrumental)（場所、道具を表わす語彙的接辞）
⑦　Heavy adverbial affixes (manner etc.)（語彙的副詞接辞）
⑧　Classificatory affixes（類別辞）
⑨　Recursive derivational morphology（反復的派生形態法）
⑩　Templatic derivational morphology（スロット型派生形態法）
⑪　Discontinuous morphemes（不連続形態素）
⑫　Inflectional/derivational entanglement（屈折と派生の絡まり合い）
⑬　Applicatives（充当相）

Fortescue et al. (2017:12-13) では、これら①〜⑬の特徴の有無を世界の 19 の複統合的言語について示しているが、表 1 ではその中からコリャーク語と、コリャーク語に地理的に近いユピック・エスキモー語、ニヴフ語、アイヌ語を抜粋して示す。

表 1　ユピック語、コリャーク語、ニヴフ語、アイヌ語の複統合性を反映した諸特徴

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
Yupi'k	+		+				+		+	(no)		+	+
Koryak	+	+	+	+	+		(no)			(no)	+		+
Nivkh	+	+	+	+					+	+		+	
Ainu	+	+	+		+				+	+		+	+

(Fortescue et al. [2017:12-13] に基づき作成)

ベーリング海峡を越えて北東アジアのコリャーク語、ニヴフ語、アイヌ語と北米のユピック・エスキモー語に共通するのは、①の動詞の多人称標示、③の具体的動詞概念を持つ語彙的動詞化接辞の存在である。これに対し、北東アジアの 3 言語とユピック・エスキモー語が異なるのは、②の名詞抱合である。すなわち、前者 3 言語には名詞抱合があるのに対し、ユピック・エスキモー語にはない。この点が、北東アジアのこれら 3 つの複統合的言語とエスキモー語とを分かつ大きな違いであることがわかる。一方、コリャーク語とユピック・エスキモー語を比べると、前者にはないが後者にはある特徴として、語彙的副詞接辞、反復的派生形態法、屈折と派生の絡まり合いがある。

3．コリャーク語の複統合性の「新しさ」

本節では、上述の 3 つの問題点のうち、(A) について検討する。Fortescue (1994, 2013) では、コリャーク語と同系のチュクチ語の複統合性の新しさについて次のように言及している（筆者和訳）。

(2a)「チュクチ語のようにおそらく『より若い』複統合的言語」　(Fortescue 2013:4)
(2b)「抱合…はそれほど古くはなく、むしろ、統語的起源により近い」　(Fortescue 2013:4)

(2c)「チュクチ語のほとんどの派生接辞は、実際には自立の語彙的語幹や小辞に由来するが、そのことはこれが比較的新しいプロセスであることを示すものである」
(Fortescue 2013:5)

(2d)「純粋に抱合的なチュクチ語やオナンダガ語は…複統合システムの発達の初期段階にあることを示している」 (Fortescue 1994:2602)

Fortescue (2013:6-7) はさらに、古い複統合性と新しい複統合性を示す次のような特徴をそれぞれ挙げている（筆者和訳）。

(3) 古い複統合性を示す特徴
- a) ほとんどの派生接辞は自立語には遡れない。
- b) 抱合された形態素には独立のストレス（あるいはその他の自立の超分節的特徴の標示）がない。
- c) 派生形態素と屈折形態素が絡まり合って配列されている。
- d) 接辞が連続的に積み重なり化石化した証拠がある。

(4) 新しい複統合性を示す特徴
- a) 派生接辞は語彙的に透明である。
- b) 抱合語幹にストレスが保持されている可能性がある。
- c) 派生接辞の方が屈折接辞よりも語幹に近いという Bybee (1985) の形態素配列に関する一般化を固守する。
- d) 抱合や動詞連続が生産的におこなわれる。

Fortescue (2013) によれば、チュクチ語では (4) の新しい複統合性を示す a), b), c), d) のすべての特徴がみられるということである。以下では、これらの特徴がコリャーク語の場合にも当てはまるかどうかについて検証していく。ただし、このうち d) の抱合や動詞連続の生産性については、Kurebito (2001, 2017) で扱っているため、本稿では取り上げず、a), b), c) に絞って考察を進める。

３．１．派生接辞の透明性

まず、(4) の a) について検証する。Fortescue (2013) は、チュクチ語のほとんどの派生接辞は自立語幹か小辞にたどれるとしている。その一例として、Fortescue (2017:228) では -ɣili「探す、狩る」をあげていることから、このような語彙的動詞化接辞（以下、「動詞化接辞」と略す）を念頭に置いていることは明らかである。そこで、コリャーク語の動詞化接辞と自立動詞の語源的関連性について見てみる。コリャーク語で確認されている動詞化接辞は、表 2 に示す通りである。表の右端には、Fortescue (2005) が挙げているチュクチ・カムチャツカ語族の祖形を示す。

表 2　動詞化接辞と自立語幹との語源的関連性

前接名詞	No	動詞化接辞	自立動詞	Proto-Chukotian
他目	1	-u/-o「食べる、飲む、殺す」	nu「食べる」	<*nu (Fortescue 2005:188)
	2	te-..-ŋ/ta-..-ŋ「作る」	tejk「作る」	<*tæjkə (Fortescue 2005:278)
	3	-ŋta/ -ŋəta「取ってくる」	-----	<*ŋəta (Fortescue 2005:203)
	4	-ɣili/-ɣele「探す」	-----	< *ɣili (Fortescue 2005:84)
	5	-ŋel/-ŋal「集めに行く」	-----	-----
	6	-ŋəjt「狩る」	-----	-----
	7	-tve/-tva「脱ぐ」	-----	-----
	8	-ɣijke「捕まえる」	-----	-----
自主	9	-ŋtet/-ŋtat「脱げる」	ŋət「群れからはぐれる」	<*ŋət (Fortescue 2005:203)
	10	-tuje/-toja「ほどける」	-----	-----
方向名詞	11	-jt「〜に行く」	jet「持ってくる」	<*jət (Fortescue 2005:124)

表 2 で挙げた動詞化接辞のうち、Fortescue (2005) が自立動詞の祖形を立てているのは、1, 2, 3, 4, 9, 11 である。コリャーク語ではこのうち 3, 4 の自立動詞は確認されていない。ただし、同系の他言語には、自立動詞としての使用が見られる。すなわち、3 はアリュートル語に自立動詞 ŋəta「到着する」がある (Kibrik et al. 2004:481)。4 は、チュクチ語に対応する自立動詞 ɣici「探す」がある (Moll and Inenlikej 1957: 31)[3]。

以上から、コリャーク語に見られる動詞化接辞のうち、約半数は語彙的に透明である可能性がある。抱合がおこなわれず、多くの語彙的意味が接辞によって表されるユピック・エスキモー語のような高度に集約された複統合性とは自ずと性質を異にすることはここからもうかがえる。とはいえ、5, 6, 7, 8, 10 のように語源的関係が確認できない接辞も半数近くある。よって、動詞化接辞の語彙的透明性の判断には、現時点ではなお慎重さが必要である。

３．２．抱合語幹におけるストレスの保持

次に、(4) の b) について検証する。コリャーク語のアクセントについては未解決の部分もあるが、ここでは論旨にかかわる要点に絞って述べる。コリャーク語のアクセントは弁別機能を持たないストレス・アクセントである。開音節ではストレスにしばしば長母音化が伴う。2 音節語では、通常、第 15 音節にストレスが落ちる[4]。3 音節以上の語では第 2 音節、第 4 音節のように偶数音節にストレスが落ちる。ただし、第 24 音節の母音がシュワの場合には第 1 音節に、第 4 音節以降の偶数音節の母音がシュワの場合には、その直後の奇数音節にストレスが落ちる。このようなストレスは、基本的には形態素の種類にかかわりなく実現される。ストレスは語幹に落ちる場合もあれば、接辞に落ちる場合もあり、抱合された語

[3] /ɣici/ の /c/ は南および東方言では [s] [š] (=[ʃ])、西方言では [č] (=[ʧ])(Fortescue 2005:7)。

[4] 2 音節語だけが第 1 音節に強勢が落ちることについて、査読者のお一人から、強勢は頭から数えて第 2 音節（iambic）が基本ではあるけれど、最終音節は余剰音節 (extrametrical)であり強勢が落ち得ないため、2 音節語では第 1 音節に強勢が落ちるとすればうまく説明ができるのではないかとのご指摘をいただいた。今後の考察の参考にさせていただきたい。

幹だけが自立的にストレスを保持するというわけではない。たとえば、(5a)(5b)(5c) は、1 音節語幹 caj「お茶」が pat「煮る」に抱合された例であるが、(5a) のように caj が偶数音節にある場合にはストレスが落ちるが、(5b)(5c) のように奇数音節にある場合にはストレスは落ちない。

(5a) t-ə-caj-pat-ə-k
[tə.ʧáj.pa.tək]
1SG.S-E-tea-boil-E-1SG.S
「私はお茶を沸かした」

(5b) caj-pat-e
[ʧaj.pá.te]
tea-boil-PF
「彼／彼女はお茶を沸かした」

(5c) t-ə-ja-caj-pat-ə-ŋ
[tə.já:.ʧaj.pá:.təŋ]
1SG.S-E-FUT-tea-boil-E-FUT
「私はお茶を沸かすだろう」

このように自立動詞に抱合される場合だけでなく、上表 2 にあげた動詞化接辞が後接する場合も同様である。(6a)(6b) は動詞化接辞 -u「飲む」が接続している例である。caj がどの音節にあるかにより caj にストレスが落ちる場合 (6a) も、落ちない場合 (6b) もある。

(6a) ja-caj-u-lqiv-ə-ŋ
[ja.ʧá:.jul.qí:.vəŋ]
FUT-tea-drink-go.to-E-FUT
「彼／彼女はお茶を飲みに行くだろう」

(6b) caj-u-pl’ətku-j
[ʧa.jú:.plʲət.kuj]
tea-drink-finish-PF
「彼／彼女はお茶を飲み終わった」

したがって、コリャーク語のストレス・アクセントは、被抱合語幹におけるストレスの保持を保証するものとはいえない。また、コリャーク語の複統合性の新しさと直接に関連づけることもできない。

３．３．派生接辞と屈折接辞の絡まり合い

次に (4) の c) について検証する。Bybee (1985) の形態素配列に関する一般化とは、語幹の意味との関連性が弱い屈折接辞は派生接辞よりも語幹から離れた位置に置かれるという原則である。Fortescue (2013:5) は、チュクチ語では派生部分と屈折部分が明確に区別され、

外側の屈折接辞を剥していくと、内側の派生語幹が残る、「玉ねぎの皮タイプの形態法 “onion skin” morphology」を示すとしている。言い換えれば、派生接辞と屈折接辞が相互に絡まり合うことはない。この点は、アサバスカ語族のコユコン語に見られるような屈折部分と派生部分が相互に絡まり合う古いタイプの複統合性とは対照的に、複統合性の新しさを示すものであるとしている。Fortescue (2013) の言う「玉ねぎの皮タイプの形態法」は、おおよそコリャーク語の形態法の実態に即しているといえる。コリャーク語の動詞の構造は、次の (7) のように図式化できる。イタリックが屈折部分、普通体が派生部分であり、Fortescue (2013:5) の言う玉ねぎの皮タイプの形態法であることがわかる。

(7)　*[S/A/P/Inverse][TAM]*(Valency1)Incorporation(Valency2)**stem**(Valency3)*[Pluralizer][TAM][S/A/P]*

(8a)(8b) はその具体例である。屈折部分はイタリック、派生部分は普通体で示す。

(8a)　*mət-ku*-niŋci-tku-jv-ə-*ŋ-new*
1PL.A-IPF-throw.away-ITR-quickly-E-IPF-3PL.O
「私たちはそれらをあちこちに大急ぎで脱ぎ捨てている／いた」

(8b)　*t-ə-ko*-ja-n-vetat-aw-ŋ-ə-*ŋ-ə-n*
1SG.A-E-IPF-want-CAUS-work-CAUS-want-E-IPF-E-3SG.O
「私は彼を働かせたい／たかった」

しかし、同一形態素が屈折と派生の両方で用いられる例も散見される。ここでは、2 つの例を挙げる。

３．３．１．je-/ja-..-ŋ「～したい」（派生）／未来（屈折）

je-/ja-..-ŋ は、「～したい」という派生接周辞としても、未来を表わす屈折接周辞としても用いられる。(9a) は「～したい」の例、(9b) は未来の例である。

(9a)　t-ə-ku-je-ʕeqev-ə-ŋ-ə-ŋ
1SG.S-E-IPF-want-go-E-want-E-IPF
「私は行きたい／たかった」

(9b)　t-ə-je-ʕeqev-ə-ŋ
1SG.S-E-FUT-go-E-FUT
「私は行くだろう」

派生接周辞としての je-/ja-..-ŋ と、屈折接周辞としての je-/ja-..-ŋ は相互に排他的ではなく、共起することもできる (10a)(10b)。

(10a) t-ə-je-je-ʕeqev-ə-ŋ-ə-ŋ
1SG.S-E-FUT-want-go-E-want-E-FUT
「私は行ってみようとするだろう」
(10b) t-ə-je-je-tejk-ə-ŋ-ŋ-ə-n ʕeja-qoj.
1SG.A-E-FUT-want-make-E-want-FUT-E-3SG.O run.a.race-reindeer(ABS.SG)
「私は競走用トナカイを調教しようとするだろう」

同一形式の je-/ja-..-ŋ が並置された場合、どちらが派生でどちらが屈折かの判断が難しい。しかし、この場合には、(9a) が参考になる。(9a) では不完了の屈折接周辞 ku-..-ŋ が派生の je-..-ŋ の外側にある。したがって、(10a)(10b) でも屈折接周辞の je-..-ŋ（未来）が派生接周辞の je-..-ŋ「～したい」の外側に配置されていると判定できる。すなわち、派生と屈折の機能分化は起こっているが、玉ねぎの皮タイプの配列順序は保持されているといえる。

３．３．２．ine-/ina-/ena- 逆受動（派生）／1 人称単数目的語（屈折）

一方、ine-/ina-/ena- は、派生と屈折の絡まり合いを示す例である。ine-/ina-/ena- は、逆受動を表わす派生接頭辞としても、1 人称単数目的語を表わす屈折接頭辞としても用いられる。je-/ja-..-ŋ とは異なり、両接頭辞は 1 つのスロットに対して排他的に出現する。これは、逆受動接辞が自動詞化を担っており、目的語とは共起しえないためである。(7) の図式に見るように、屈折と派生では本来、スロットが違う。ところが、派生の ine-/ina-/ena- と屈折の ine-/ina-/ena- は 1 つのスロットに対して相互排他的にふるまっている。これは、玉ねぎの皮タイプの配列順序への違反、言い換えれば、屈折と派生の絡まり合いと考えられる。(11a) は逆受動の ena- の例、(11b) は 1 人称単数目的語の ina- の例である。

(11a) cawat-etəŋ k-ena-kme-la-ŋ.
lasso-ALL IPF-ANTP-catch-PL-IPF
「彼らは投げ縄をつかんでいる／いた」
(11b) ə-nan ina-n-mitətv-at-i.
3SG-ERG 1SG.O-CAUS-learn-CAUS-PF
「彼は私に教えてくれた」

以上から、コリャーク語は主に玉ねぎの皮タイプの形態法を示しつつも、派生と屈折の絡まり合いが見られる形式もあり、その部分ではより進行した複統合性を示すと言える。

４．所有者昇格・充当相化における複統合性の進行度

本節では、第 1 節で挙げた問題点のうち、(B) について検討する。Fortescue (2013) は、チュクチ語の所有者昇格と充当相化は、節全体を含む統語操作でありながら、それが形態的手段（すなわち、接辞）により表されていることから、統語法と形態法の絡まり合いがあり、より進んだ古い複統合性を示すとしている。これは、Dunn (1999) で、チュクチ語では所有者昇格の際には逆受動化接頭辞 ine-/ena-、充当相化の際には ine-/ena- や使役接周辞 r-..-et/

-at, r-..-ew/-aw が用いられるとされていることを受けた指摘である。Fortescue (2013) は、このことから、チュクチ語は分析的な方向への後戻りがもはや不可能な、一方向的な複統合化に近づいているとする。

一方、コリャーク語では、管見の限り、所有者昇格や充当相化を明示的に示す接辞は確認されていない。このことは複統合性のコンテキストの中で何を意味するのであろうか。本節ではコリャーク語で所有者昇格や充当相化がどのようにおこなわれるかを観察し、これがFortescue (2013) の言うようなより進行した複統合性を示すのか否かについて検証する。

４．１．所有者昇格

コリャーク語の所有者昇格は、所有接辞[5]を取る所有者を絶対格を取る自動詞主語あるいは他動詞目的語に昇格させることにより実現する。その際、被所有物は動詞に抱合されるか、あるいは動詞化接辞と結合する。

まず、自動詞の例を見る。(12a) では、被所有物 qoja-w「トナカイ（絶複）」が自動詞主語である。一方、(12b) の所有者昇格の例では、所有者が自動詞主語になり、被所有物は自動詞 veʕ「死ぬ」に抱合される。その際、動詞は自動詞活用する。

(12a) en’pic-in　　qoja-w　　veʕ-ə-la-j.
　　father-POSS　　reindeer-ABS.PL　die-E-PL-PF
(12b) en’pic　　qoja-veʕ-e.
　　father(ABS.SG)　reindeer-die-PF
　　「父のトナカイたちは死んだ」

ちなみに、コリャーク語では所有者を持たない自動詞主語（主に自然現象）の抱合があり、(12b) と同様に自動詞活用する (13a)(13b)。

(13a) tijk-ə-jelqiv-i
　　sun-E-set-PF
　　「日が沈んだ」
(13b) peŋa-ɣala-j
　　snow-pass.over-PF
　　「雪が止んだ」

次に、他動詞の例を見る。(14a)(15a) は所有者が所有接辞で表され、被所有物が他動詞目的語として現れている他動詞文である。一方、(14b)(15b) の所有者昇格の文では所有者が他動詞目的語になり、被所有物は他動詞に抱合されている。他動詞主語の人称・数は動詞に接頭辞 t-（1 単主）で標示されているため、人称代名詞は出現しなくても主語は明確である。

[5] 所有接辞には-nin, -n/-nən, -in/-en, -kin/-ken がある。これらは、名詞句階層により使い分けられる。詳細はKurebito (2004)、呉人 (2020) を参照されたい。

(14a) t-ə-qaplo-n qoj-en ɣətka-lŋ-ə-n.
1SG.A-E-kick-3SG.O reindeer-POSS leg-pair.of-E-ABS.SG
(14b) qoja-ŋa t-ə-ɣətka-qaplo-n.
reindeer-ABS.SG 1SG.A-E-leg-kick-3SG.O
「私はトナカイの足を蹴った」

(15a) ujetik-in ŋilŋ-ə-n t'-ə-cvi-n.
sledge-POSS rope-E-ABS.SG 1SG.A-E-cut-3SG.O
(15b) ujetik t-ə-ŋilŋ-ə-cvi-n.
sledge(ABS.SG) 1SG.A-E-rope-E-cut-3SG.O
「私は橇のロープを切った」

自立の他動詞に意味的に対応する動詞化接辞がある場合には、被所有物はその動詞化接辞と結合する。(16a)(17a) は、所有者が所有接辞 -in/-en で表され、被所有物が他動詞目的語として現れている他動詞文である。一方、(16b)は、動詞化接辞 -o「食べる」、(17b) は -tva「剥ぐ」による所有者昇格の例である。

(16a) qoj-en pont-ə t-ə-nu-n.
reindeer-POSS lever-ABS.SG 1SG.A-E-eat-3SG.O
(16b) qoja-ŋa t-ə-pont-o-n.
reindeer-ABS.SG 1SG.A-E-lever-eat-3SG.O
「私はトナカイの肝臓を食べた」

(17a) təmjo-ken nalɣ-ə-n t-ə-pje-n.
killed.one-POSS fur.skin-E-ABS.SG 1SG.A-E-take.off-3SG.O
(17b) təmjo-n t-ə-nalɣ-ə-tva-n.
killed.one-ABS.SG 1SG.A-E-fur.skin-E-take.off-3SG.O
「私は死んだトナカイの毛皮を剥がした」

ここで注目したいのは、所有者昇格の例 (14b)(15b)(16b)(17b) で、派生動詞語幹が所有者昇格を示す接辞を持たないまま他動詞活用している点である。これは、目的語抱合の一般的制約からは逸脱したふるまいである。所有者のない他動詞目的語の抱合や動詞化接辞との結合がなされる場合には、他動詞活用ではなく自動詞活用するからである。(14b)(15b)(16b)(17b) を次の自動詞活用している (18a)(18b)(18c)(18d) と比較されたい。

(18a) t-ə-ɣətka-qaplo-k
1SG.S-E-leg-kick-1SG.S
「私は足を蹴った」

(18b) t-ə-ŋilŋ-ə-cvi-k
1SG.S-E-rope-E-cut-1SG.S
「私はロープを切った」
(18c) t-ə-pont-o-k
1SG.S-E-lever-eat-1SG.S
「私は肝臓を食べた」
(18d) t-ə-nalɣ-ə-tva-k
1SG.S-E-fur.skin-E-take.off-1SG.S
「私は毛皮を剥いだ」

一方、Fortescue (2013) が想定しているのは、他動詞化接辞が付与された所有者昇格である。例えば、チュクチ語では逆受動接頭辞 ena- が所有者昇格に際して派生動詞語幹に付加される (19) のような例が見られる。なお、グロスは本稿のコリャーク語の表記方法と統一するため、若干の改変を加えている。

(19) cama　　ləɣen　　n-ena-ɣətka-mla-tko-jw-ə-qenat.
and　　really　　HAB-TR-leg-break-ITR-INTS-E-3PL.O
'And simply broke their legs.'　　(Dunn 1999:228)

(19) では、被所有物である ɣətka「足」が他動詞 mla「折る」に抱合されて形成された自動詞語幹に逆受動化接辞 ena- が付加され、他動詞活用している。Dunn (1999) は、他動詞活用していることから、この ena- に 'TR'、すなわち、他動詞化というグロスを付しているが、ena- の本来の逆受動化（＝自動詞化）の機能を考えると奇異な印象を拭えない。

しかしながら、チュクチ語でもコリャーク語同様の (20) のような例も確認されている[6]。

(20) təm-nen　　ʔinə=ʔm　　pilɣ-ə-lwi-nin=ʔm.
kill-3SG.A/3SG.O　　wolf.3SG.ABS=EMPH　　throat-E-cut-3SG.A/3SG.O=EMPH
'He killed the wolf, cut its throat.'　　(Dunn 1999:228)

この例では、所有者のʔinə「オオカミ」が他動詞目的語に昇格し、被所有物である pilɣ「喉」が他動詞 lwi「切る」に抱合されている。すなわち、pilɣ-ə-lwi は自動詞語幹であるにもかかわらず、他動詞活用しているのである。

４．２．充当相

コリャーク語では充当相にも、所有者昇格と同様の奇妙なふるまいが見られる（呉人 2019）。すなわち、斜格名詞が絶対格の目的語に昇格し、他動詞文として顕現する点では、

[6] Fortescue (2017:227) でも、実はこれと同じ例が引用されているが、その特異なふるまいについては言及されていない。

充当相に典型的なふるまいをする。しかし、充当相化を明示的に示す接辞はなく、所有者昇格同様、自動詞語幹が他動詞活用する。充当相が自動詞語幹から形成される場合には、他動詞語幹に派生されることなく、自動詞語幹のまま他動詞活用する。充当相が他動詞語幹から形成される場合には、２つの目的語が絶対格を取ることは許されないため、元の目的語は動詞に抱合されるか、あるいは動詞化接辞と結合する。一方、斜格から昇格した名詞だけは目的語として絶対格で表される。

充当相化は、受益者（与格）、場所（場所格）、方向（方向格）を表わす斜格名詞に見られるが、ここでは最も一般的な受益者の充当相を取り上げ、呉人 (2019) に基づき具体例を見る。まず、自動詞から形成される例を見る。(21a) は受益者が与格で現れる非充当相の自動詞文である。(21b) は対応する充当相化された他動詞文である。(21a) では自動詞語幹 kukejv「料理する」が自動詞活用しているのに対し、(21b) では kukejv がそのまま他動詞活用していることに注意されたい。

(21a) əlla kukejv-i kəmeŋ-ə-ŋ.
mother(ABS.SG) cook-3SG.S child-E-DAT
(21b) əllʕ-a kəmiŋ-ə-n kukejv-ə-ni-n.
mother-INS(ERG) child-E-ABS.SG cook-E-3SG.A-3SG.O
「母は子供のために料理した」

同様のふるまいは、次の (22b) でも見られる。pecɣ-ə-ŋta「食料を取りに行く」は、自立名詞 pecɣ「食料」に動詞化接辞 -ŋta「取ってくる」が接尾された自動詞語幹である。そのことは、非充当相文の (22a) における pecɣ-ə-ŋta が自動詞活用していることから明らかである。ところが、充当相文の (22b) では pecɣ-ə-ŋta がそのまま他動詞活用している。

(22a) kəmiŋ-ə-n ja-pecɣ-ə-ŋta-ŋ an’pec-ə-ŋ wojv-ə-ŋqo.
child-E-ABS.SG FUT-food-E-go.for-FUT father-E-DAT village-E-ABL
(22a) kəmiŋ-a ja-pecɣ-ə-ŋta-ŋ-ne-n en’pic
child-INS(ERG) FUT-food-E-go.for-FUT-3SG.A-3SG.O father(ABS.SG)
wojv-ə-ŋqo.
village-E-ABL
「子どもは父親のために村から食料を取ってくるだろう」

次に充当相が他動詞語幹から形成される例を見る。この場合、受益者が絶対格に昇格すると、元の目的語は他動詞語幹に抱合される。(23a) は、受益者 jamkəlʕ「客」が与格で現れる非充当相文である。一方、(23b) は、jamkəlʕ「客」が絶対格に昇格するとともに、元の目的語 təllətəl「扉」が他動詞語幹 nweŋet「開く」に抱合されている充当相文である。

(23a) ɣəm-nan jamkəlʕ-ə-ŋ t-ə-nweŋet-ə-n təllətəl.
1SG-ERG guest-E-DAT 1SG.A-E-open-E-3SG.O door(ABS.SG)

(23b) ɣəm-nan　　jamkəlʕ-ə-n　　t-ə-təll-ə-nwaŋat-ə-n.
1SG-ERG　　guest-E-ABS.SG　1SG.A-E-door-E-open-E-3SG.O
「私は客のために扉を開けた」

一方、(18a)-(18d)でも見たように、通常、他動詞に目的語が抱合される場合には、自動詞活用をする。(24a) は目的語の抱合が起こらずに他動詞活用している例、(24b) は目的語の抱合が起こり自動詞活用している例である (Kurebito 2001)。

(24a) ɣəm-nan　　t-ə-mle-n　　uttəut.
1SG-ERG　　1SG.S-E-break-3SG.O　stick(ABS.SG)
(24b) ɣəmmo　　t-utt-ə-mle-k.
1SG.ABS　1SG.S-stick-E-break-1SG.S
「私は木を折った」

これに対し、(23b) の充当相の例では、同じく他動詞語幹に目的語が抱合されているにもかかわらず、他動詞活用している。

次に、受益者名詞が動詞化接辞と結合する例を見る。(25a) では自立他動詞語幹 tejk「作る」が用いられ、受益者は与格で現れている。一方、(25b) では代わりに同じ意味の動詞化接周辞 te-..-ŋ が目的語と結合して自動詞語幹を形成し、そのまま他動詞活用している。

(25a) əllʕ-a　　ɣəmk-ə-ŋ　　tejk-ə-ni-n
mother-INS(ERG)　　1SG-E-DAT　　make-E-3SG.A-3SG.O
n-ə-mejŋ-ə-qin　　ʕel'uci.
PRP-E-big-E-ABS.SG　doll(ABS.SG)
(25b) əllʕ-a　　ɣəmmo　　ine-te-mejŋ-ə-ʕel'uci-ŋ-i.
mother-INS(ERG)　　1SG.ABS　　1SG.O-make-big-E-doll-make-PF
「母は私のために大きな人形を作ってくれた」

一方、チュクチ語では逆受動接頭辞 ine-/ena-、使役接周辞 n-/r-..-et/-at (-ew/-aw) が充当相化の機能を担っている例が見られる。 (26) は ena- の例、(27) は n-..-at の例である。

(26) t-ena-pela-ɣʔa-n　　ŋew-miry-ə-n　　coqar-a.
1SG.A-APPL-leave-TH-3SG.O　　FEM-grandparent-E-ABS.SG　bread-INS
'I left granny some bread.'　　(Dunn 1999: 215)
(27) qərəm　　ləɣen　　XOROSHIJ　　ʔən-ə-n-wetɣa-at-ɣʔe-n.
NEG　　really　　good　　3A.INT-E-APPL-speak-TH-TH-3SG.O
'They don't speak to him very nicely.'　　(Dunn 1999:213)

しかし、チュクチ語でもコリャーク語同様、元の目的語が他動詞語幹に抱合され形成され

た自動詞語幹が他動詞活用する例も見られる (28)。

(28) tejucɣ-ə-n taqʔa-təjo-nen.
sack-E-ABS.SG supplies-put-3SG.A/3SG.O
'She put food for the road in the sack.' (Dunn 1999:227)

４．３．まとめ

以上見た所有格昇格と充当相化についてまとめると、次のようになる。

1) コリャーク語の所有者昇格では、抱合や動詞化接辞により派生された自動詞語幹がそのまま他動詞活用する。チュクチ語でも同様のふるまいが見られるが、この他、逆受動接頭辞が、目的語が抱合されて形成された自動詞語幹に付加され、他動詞化の機能を担う例も見られる。
2) コリャーク語の充当相では、非派生自動詞語幹や、抱合や動詞化接辞による派生自動詞語幹がそのまま他動詞活用する。一方、チュクチ語でも同様のふるまいが見られるが、逆受動接頭辞や使役接周辞が他動詞化の機能を担う例も見られる。

両言語には、このように所有者昇格や充当相化を示す明示的な接辞が見られるか否かで違いがある。とはいえ、目的語を抱合して形成された派生自動詞語幹がそのままで他動詞活用する例が見られる点では共通している。この一般的な制約から逸脱したふるまいは、Fortescue (2013) の言うようなより進行した複統合性を反映しているとは考えにくい。むしろ、新たに生じた統語操作に形態的側面が対応しきれていないかのようなぎこちなさを感じさせる。したがって、明示的な形態的標示のない所有者昇格や充当相がより進行した複統合性を示す例として妥当かどうかは、再検討の余地があると考える。

５．動詞の多人称標示とスロット

本節では、第 1 節であげた問題点の (C)、すなわち、Fortescue (2017) が複統合的言語の特徴のひとつとして挙げている拘束形式による動詞の多人称標示について見る。コリャーク語は、動詞の側で自動詞主語、他動詞主語、直接目的語を標示する多人称標示タイプである[7]。これらは、動詞の最も外側、すなわち、「玉ねぎ」の外皮の部分で標示される。(29) は自動詞の例で、1 人称単数主語を表わす接周辞 t-..-k が両端に配置されている。一方、他動詞の場合、この最も外側のスロットは左端、右端とも 1 つずつ人称が標示される。たとえば、(30) では 1 人称単数主語を表わす t- が左端に、3 人称単数目的語を表わす -n が右端

[7] 授与動詞では例外的に、人称標示に名詞句階層が関与し、1，2 人称が間接目的語である場合には、その人称・数が標示される（3 人称の場合には間接目的語ではなく直接目的語を標示）。
(a) əccaj-ə-na-k k-ena-jəl-ŋəvo-ŋ ɣəmk-ə-ŋ nalɣ-ə-tʕul-u.
aunt-E-AN.SG-LOC(ERG) IPF-1SG.O-give-HAB-IPF 1SG-E-DAT fur.skin-E-piece-ABS.PL
「叔母さんは私に毛皮の切れ端をくれた」
(b) ɣəm-nan tewʕel-u kəmeŋ-ə-ŋ t-ə-jəl-new.
1SG-ERG dried.fish-ABS.PL child-E-DAT 1SG.A-E-give-3PL.O
「私は干し魚（複数）を子どもにあげた」

に配置されている。

(29) t-ə-kmiŋ-at-ə-k
1SG.S-E-baby-VBL-E-1SG.S
「私は出産した」

(30) t-eto-n ŋavakək.
1SG.A-give.birth.to-3SG.O daughter (ABS.SG)
「私は娘を産んだ」

人称標示は法によっても異なり、とりわけ他動詞は複雑であるが、ここでは人称に関して同様のふるまいを見せる定形動詞の直説法（不完了相、完了相）に焦点を絞り見ていく。表 3 は自動詞、表 4 は他動詞の人称・数パラダイムである。人称接辞の中で形態的に透明で人称代名詞との語源的関連の可能性が考えられるのは、-ɣəm（1 単目）: ɣəmmo, -ɣi/-ɣe（2 単目）: ɣəcci、mət-（1 双複自主・他主）・-mək（1 双複他主）: muji（双）・muju（複）、-tək（2 双複自主・目）: tuji（双）・tuju（複）などである。一方、t-（1 単自主・他主）、ine-/ina-/ena-（1 単目）、反転接頭辞 ne-/na- などは、いずれも自立語幹との語源的関係性は見い出せず、純然たる接辞である可能性が高い。

表 3　完了・不完了（直説法）自動詞の人称標示

	1	2	3
SG	t-	---	----
DU	mət-	-tək	-i/-e
PL	mət- -la	-la-tək	-la

表 4　完了・不完了（直説法）他動詞の人称標示

<table>
<tr><td>O</td><td colspan="6">A</td></tr>
<tr><td></td><td>1SG</td><td>1PL</td><td>2SG</td><td>2PL</td><td>3SG</td><td>3PL</td></tr>
<tr><td>1SG</td><td colspan="2" rowspan="3"></td><td>ine-/ina-/ena-</td><td>ine-/ina-/ena- -tək</td><td>ine-/ina-/ena- -n</td><td>ne-/na- -ɣəm</td></tr>
<tr><td>1DU</td><td colspan="4">ne-/na- -mək</td></tr>
<tr><td>1PL</td><td colspan="4">na- -la-mək</td></tr>
<tr><td>2SG</td><td>t- -ɣi/-ɣe</td><td>mət- -ɣi/-ɣe</td><td colspan="2" rowspan="3"></td><td colspan="2">ne-/na- -ɣi/-ɣe</td></tr>
<tr><td>2DU</td><td>t- -tək</td><td>mət- -tək</td><td colspan="2">ne-/na- -tək</td></tr>
<tr><td>2PL</td><td>t- -la -tək</td><td>mət- -la -tək</td><td colspan="2">na- -la -tək</td></tr>
<tr><td>3SG</td><td>t- -n</td><td>mət- -n</td><td>-n</td><td>-la -tkə</td><td>-ni/-ne -n</td><td>ne-/na- -n</td></tr>
<tr><td>3DU</td><td>t- -ne/-na-t</td><td>mət- -ne/-na-t</td><td>-ne/-na-t</td><td>-tkə</td><td rowspan="2"></td><td>ne-/na- -net/-nat</td></tr>
<tr><td>3PL</td><td>t- -ne/-na-w</td><td>mət- -ne/-na-w</td><td>-ne/-naw</td><td>-la -tkə</td><td>ne-/na- -new/-naw</td></tr>
</table>

人称・数パラダイム、とりわけ他動詞のそれは非常に複雑であるが、その要因としては次のようなことが考えられる。

1) 分裂型の人称標示：

1 人称（単双複）・2 人称（単）は主格・対格型、2 人称（双複）は能格型、3 人称（単双複）は三立型のように、人称・数により異なる人称標示のタイプを示す。

2) 反転動詞の標示：

2 人称、3 人称他動詞主語は、1 人称＞2 人称＞3 人称単数＞3 人称複数という階層の高位の名詞を目的語にする場合、反転接頭辞 ne-/na- を取る。

3) 1 人称単数目的語の標示：

大まかには、他動詞では接頭辞で主語、接尾辞で目的語の人称・数が標示されるが、1 人称単数目的語は接頭辞 (ine-/ina-/ena-) で標示される（ただし、主語が 3 人称複数の場合の 1 人称単数目的語のみ接尾辞 -ɣəm で標示）。

ここで注目したいのは、2) の反転接頭辞 ne-/na- と 3) の 1 人称単数目的語を表わす ine-/ina-/ena- の相補分布的関係である（上表 4 の網掛け部分）。この 2 つの接頭辞はいずれも左端のスロットを占め、この位置で相互排他的である。2 人称・3 人称が主語、1 人称単数が目的語の場合、2) の階層に従えば ne-/na- が左端のスロットに現れてしかるべきである。ところが、ne-/na-が現れるのは 3 人称複数が主語の場合だけで、それ以外の場合には、ine-/ina-/ena-が現れる。なぜ 3 人称複数が主語の場合にだけ反転接頭辞が左端のスロットに現れ、その他の場合には現れないのかは現時点では説明することができない。しかし、このような両接頭辞の相互排他性により、次のような一見奇妙な人称標示が導かれると考えられる。

	＜左端の人称スロット＞		＜右端の人称スロット＞
①	1 人称単数目的語 ine-/ina-/ena-	／	2 人称複数主語 -tək
②	1 人称単数目的語 ine-/ina-/ena-	／	3 人称単数主語 -n
③	3 人称複数主語 ne-/na-	／	1 人称単数目的語 -ɣəm

①の -tək は通常は、2 人称（双複）自動詞主語、2 人称（双複）目的語を表わす人称接辞である。ここでは、ine-/ina-/ena- が左端のスロットを占めているため、右端のスロットで主語を標示することになり、2 人称（双複）他動詞主語の人称標識として援用されていると考えられる。②も同様に、ine-/ina-/ena-が左端のスロットを占めており、主語は右端のスロットでしか表わしえないために、本来、他動詞目的語を表わす -n が主語標示に援用されたと考えられる。一方、③は、ne-/na- が左端のスロットを占めて ine-/ina-/ena-の出現が抑制されている。そこで、1 人称単数目的語は右端のスロットで標示するしかないために -ɣəm という、おそらく自立の人称代名詞と関係のある接尾辞を配置したものと考えられる。①②③に共通しているのは、最も外側の人称スロットに対して ine-/ina-/ena-と ne-/na-が相互排他的であることから誘引された特異なふるまいである点である。言い換えれば、最も外側の人称スロットの固持が本来の人称標示よりも優先されるほど、その制約が強いと考えられる。このような最も外側の人称スロットを堅持しようとする指向性は、おのずと語の自由な拡張に制限をかけるであろうことを予想させる。加えて、その引き金となる ine-/ina-/ena- や ne-/na- が上述の通り、いずれも自立語にたどれない純然たる拘束形式である可能性が高いとす

るならば、このことは、複統合性の「新旧」の議論とも無関係ではなくなってくるはずである。

６．おわりに

本稿では、Fortescue (2013) の主張の検証を通して、コリャーク語の複統合性をめぐる諸問題について考察をおこなった。その結果、次の点が指摘された。

① コリャーク語の複統合性の新しさを示す根拠として挙げた諸点について、次のような反証が見出される。
   (a) 動詞化接辞の中には自立語との語源的関係がたどれないものが約半数ある。
   (b) ストレス・アクセントは、被抱合語幹の自立性を必ずしも保証するものではない。
   (c) おおむね「玉ねぎの皮」型形態法を示すが、一部、屈折と派生の絡まり合いが見られる。
② Fortescue (2013) がより進行した複統合性を反映した統語現象として挙げている所有者昇格と充当相は、コリャーク語では自動詞語幹が他動詞活用するという特異なふるまいを見せることから、むしろ新しい現象として捉えなおす可能性もある。
③ 人称は左端と右端のスロットで標示されるが、一人称単数目的語の ine-/ina-/ena-と反転動詞の ne-/na- は、左端のスロットに相補分布しており、そのことは、他の人称接辞の特異な出現を促している。これは最も外側に配置される人称スロットの強固さを反映したものと考えられる。とりわけ、両接頭辞は自立語とは語源的関係が見出されない純然たる接辞の可能性があるため、人称標示はコリャーク語の複統合性の新旧の議論にもかかわってくる問題である。

略語

A=agent-like argument (transitive subject), ABL=ablative, ABS=absolutive, ALL=allative, AN=animate, ANTP=antipassive, APPL=applicative, CAUS=causative, DAT=dative, DU=dual, E=epenthetic, EMPH=emphatic, ERG=ergative, FUT=future, HAB=habitual, INS=instrumental, INT=intentional, INTS=intensifier, INV=inverse, IPF=imperfective, ITR=iterative, LOC=locative, NEG=negative, O=object, PF=perfective, PL=plural, POSS=possessive, PRP=property predication, S=single argument (intransitive subject), SG=singular, TH=thematic suffix, TR=transitivity marker, VBL=verbalizer

参考文献

Bybee, J. L. (1985) *Morphology. A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Dunn, M. J. (1999) *A Grammar of Chukchi*. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of Australian National University.

Fortescue, M. (1994) Polysynthetic Morphology. In: R. E. Asher and J. M. Y. Simpson (eds.) *Encyclopedia of Language and Linguistics,* 2601-2602. Oxford: Pergamon Press.

Fortescue, M. (2005) *Comparative Chukotko-Kamchatkan Dictionary.* Berlin and New York:

Mouton de Gruyter (Trends in Linguistics Documentation 23).

Fortescue, M. (2013) Polysynthesis in the Arctic/Sub-Arctic: How Recent Is It? In: B. Bicke, L. A. Grenoble, D. A. Peterson, and A. Timberlake (eds.) *Language Typology and Historical Contingency. Festschrift fir Johanna Nichols*, 241-264. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins (Typological Studies in Language 104).

Fortescue, M., M. Mithun, and N. Evans (eds.) (2017) *The Oxford Handbook of Polysynthesis.* Oxford: Oxford University Press.

Greenberg, J. H. (1960) A Quantitative Approach to the Morphological Typology of Language. *International Journal of American Linguistics* 26: 178-194.

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1996)『言語学大辞典第 6 巻　術語編』、東京：三省堂.

Kibrik, A. E., Kodzasov, S. V. and Muravyova, I. A. (2004) *Language and Folklore of the Alutor People*. ELPR A2-042. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

呉人惠 (2015)「コリャーク語の複統合性 ―抱合と接辞の折衷タイプ―」『北方言語研究』5: 55-82.

呉人惠 (2019)「コリャーク語の与格名詞をめぐる諸現象について ―充当相、S=A交替、授与動詞―」『北方言語研究』9:13:29.

呉人惠 (2020)「コリャーク語の所有表現と名詞句階層 ―英語との共通性に着目して―」『人文知のカレイドスコープ　富山大学人文学部叢書III』, 28-39. 富山：桂書房.

Kurebito, M. (2001) Noun Incorporation in Koryak. In: O. Miyaoka and F. Endo (eds.) *Languages of the North Pacific Rim* 6. ELPR A2-001, 29-58. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

Kurebito, M. (2004) Possessive and Relational in Koryak Viewed from the Animacy Hierarchy. In: O. Miyaoka and F. Endo (eds.) *Languages of the North Pacific Rim* 9. ELPR A2-043, 35-46. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

Kurebito, M. (2017) Koryak. In: M. Fortescue, M. Mithun, and N. Evans (eds.) *The Oxford Handbook of Polysynthesis*, 832-850. Oxford: Oxford University Press.

宮岡伯人 (1992)「環北太平洋の言語」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』, 3-66. 東京：三省堂.

Moll, T. A. and Inenlikej, P. I. (1957) *Chukotsko-russkij slovar'*. Leningrad.

Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt Brace & World.

Revisiting Polysynthesis in Koryak with Special Focus on its "Newness" and the Peculiarity of the Inflectional Person Slot

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

Keywords: verbalizing affixes, stress accent, possessor raising, applicatives, polypersonal marking

The present paper examines the newness of the polysynthetic character of Koryak. First, it verifies the following three points presented by Fortescue (2013) as reflecting its newness:

1) The etymological relatedness of the heavy verbalizing affixes to independent verbs.
2) Residual stress accent on incorporated noun stems
3) "Onion skin morphology" and the absence of an entanglement of inflectional and derivational morphemes.

The results include the following:

a) Almost half of the verbalizing affixes are not traceable to independent verbs.
b) Koryak has free stress accent and the stress of a morpheme can vary according to its position in a word. Therefore we cannot directly relate the stress of incorporated stems to the newness of polysynthesis.
c) There are partial entanglements of inflection and derivation in such morphemes as je-/ja-..-ŋ 'want to' and future tense, and ine-/ina-/ena- for antipassive and 1SG.O.

Next, the present paper examines the validity of the argument of Fortescue (2013) that such processes as possessor raising and applicative formation reflect a more advanced stage of polysynthesis in that they involve the whole clause but are expressed by morphological means. We find that the processes might rather reflect the low penetration rate of these processes in Koryak, as in both processes intransitive derivational stems conjugate transitively without morphological realization.

Lastly, it examines the polypersonal marking of the language, specifically the peculiar behavior of ine-/ina-/ena- '1SG.O', which is added to the outermost slot of the verb complex. The result reveals that the outermost person markers might restrain the free extension of the word. However, the clarification of the mutual relationship between the features and the newness of polysynthesis remains an issue to be resolved in the future.

（くれびとめぐみ　kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp）